

種子島におけるトガリアメンボの初記録

中峯 浩司*

First Record of *Rhagadotarsus kraepelini* Breddin, 1905 in Tanegashima

NAKAMINE Kouji*

はじめに

トガリアメンボ *Rhagadotarsus kraepelini* Breddin, 1905 は、体長 3.3 ~ 4.4 mm 程度の小型のアメンボで、ニューギニア原産の外来種である。日本では2001年に兵庫県淡路島で初めて確認され、その後急速に分布を拡大している(中島ほか, 2020)。九州地方では2009年に初記録があり、2012年時点での分布概要が明らかにされた(大原, 2013)。さらに、鹿児島県では2013年に初確認され、翌2014~2015年春にかけて県内各地で精力的な調査が行われた。その結果、2014年時点での分布が明らかとなった(中峯, 2014a; 中峯, 2014b)。さらに、その後も薩摩半島中部および大隅半島中部へと分布域を拡大していることが確認されている(中峯, 2018; 中峯, 2019; 中峯, 2023a; 中峯, 2023b)。

今回、筆者は大隅半島の南方約40 kmに位置する種子島において(図1)、トガリアメンボを採集した。本記録は種子島における初記録であると同時に、本種の国内南限を示すものである。あわせて、発見当時に実施した島内他地点における生息調査の結果および、西京ダムにおける約1ヶ月後の観察結果についても報告する。

1 発見時の状況

本誌別稿に採集記録を掲載したが、発見当時の状況は以下のとおりである。2025年9月26日、筆者は西之表市北部の西京ダムを訪れた。目的は水生昆虫の調査であり、久しぶりの訪問であったことから、トガリアメンボが侵入している可能性も念頭に置いていた。駐車場からボート乗り場へ下る小道の途中で(図2)、水面まで約2~3mの地点から湖面を覗いたところ、水際の植物が繁茂する付近に小型のアメンボ類が認められた。小雨の降る状況下であったが、直感的にトガリアメンボの可能性を感じ、水際まで降りて水

網で採集したところ、本種であることを確認した(図3)。この地点で2♂2♀を採集した。

本種が本ダムに侵入してからの経過時間を推測するため、他地点での分布状況を確認することとした。ダム湖中央付近に位置するくじら橋(図4)を渡り対岸まで踏査した結果、くじら橋の両端では個体密度が高く、橋沿いにも少数ながら個体が確認された。また、オスが小さな木片を押しながら遊泳する行動も複数観察された(図5)。

調査時間の制約により他地点の詳細な確認は行っていないが、以上の観察結果から、本種はダム湖全体に広く分布している可能性が高いと考えられた。調査地点を図6に示す。



図1 種子島位置図



図2 西京ダム、ボート乗り場

* 鹿児島県立博物館

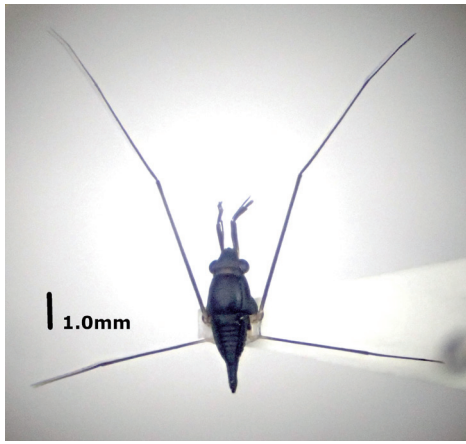


図3 種子島初記録となったトガリアメンボ(♀)



図4 くじら橋(9月26日、この後撤去された)



図5 木片を押しながら波紋を広げて♀を誘うトガリアメンボ♂



図6 西京ダムの調査地

2 他の池沼の状況

他の池沼への分布拡大の有無を確認するため、翌9月27日にかけて調査を行った。調査方法は、水辺に可能な限り接近し、水面を遊泳する個体を目視によって探索するというものである。

ナミアメンボの小型幼虫は本種と紛らわしいが、識別は可能である。ナミアメンボの幼虫は遊泳に伴って明瞭な波紋を生じるのに対し、トガリアメンボは成虫であってもほとんど波紋を生じない。この点は目視の際の有効な識別形質となる。

また、ナミアメンボの幼虫は池畔の樹木がオーバーハングするような薄暗い環境を好む傾向があるのに対し、トガリアメンボは比較的明るく開放的な水面を利用することが多く、こうした微環境選好の違いも判別の参考となる。次に調査結果を示す(図7)。

・中種子町増田(ため池)、9月26日調査。本種は確認されなかった。近隣の池でも確認されず、この池ではナミアメンボが多数見られた。



図7 種子島のトガリアメンボの分布(2025年)
● 2025年9月26日、最初の確認地(西京ダム)
○ 2025年9月26~27日の調査で見つからなかった池

- ・南種子町上中（宇宙ヶ丘公園の池），9月26日調査。確認されなかった。9月27日にもほぼ一周して探したが，やはり確認されなかった。
- ・南種子町上里（新上里ダム），9月26日調査。確認されなかった。
- ・南種子町荃永（宝満の池），9月27日調査。確認されなかった。
- ・南種子町新長谷（長谷の池），9月27日調査。確認されなかった。水量が減少しやや離れた位置からの観察となった。
- ・中種子町増田郡原（ため池），9月27日調査。確認されなかった。ナミアメンボは普通に見られた。

3 西京ダムの約1ヶ月後の様子

2025年11月3日に再調査を行った。当日はくじら橋が撤去作業中であり，同橋東側周辺ではトガリアメンボは確認されなかった。このため調査は主としてダム湖南部で実施し，ダム周辺の遊歩道から水面を観察して本種の有無を確認した。

その結果，本種が確認されたのは西側の1地点のみで，個体数も少なかった（図6）。当日はやや風があり，水面にさざ波が立っていたため観察条件は良好とはいえなかったが，確認地点は南向きの岸辺で風当たりが弱く，比較的穏やかな水面が保たれていた。岸辺からの目視観察により，散発的に遊泳する個体を確認することができた。確認のため1♂を水網で採集した。なお，近接する木枝がオーバーハングする場所や南端のワンドでは，ナミアメンボが多数確認された。

4 考察

西京ダムのトガリアメンボはどこから侵入したのだろうか。本種の分布状況を踏まえると，鹿児島県本土から飛来した雌個体に由来すると考えるのが自然である。では，種子島への侵入時期はいつ頃であろうか。仮に最初の侵入地点が西京ダムであったとすると，発見当時すでにダム湖内で広く確認された一方，周辺の池沼では分布が確認されなかったことから，侵入は比較的近年であった可能性が高い。現時点では，

2023年あるいは2024年頃と推定するのが妥当であろう。仮に2024年の時点で発見時と同程度の個体数がすでに存在していたとすれば，その年の秋には有翅虫による分散が島内水域へ広く生じていても不自然ではない。しかし実際には他の池沼での確認例はなく，この点は侵入後の経過年数がまだ短いことを示唆していると考えられる。

おわりに

西之表市内には，西京ダム以外にも本種が侵入し得る池沼が複数存在する。これらの水域において2026年初夏までに調査を実施し，幼虫や無翅型成虫が確認されれば，その池には前年以前から定着していたことが明らかとなり，侵入時期の推定をさらに絞り込むことが可能となる。いずれにせよ，トガリアメンボは外来種であり，その分布拡大の動向を把握することは重要である。今後も継続的な現地調査を行い，本種の定着状況および分布拡大の過程を記録していく必要がある。

引用文献

- 中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之(2020) ネイチャーガイド日本の水生昆虫 . 351pp. 文一総合出版，東京 .
- 中峯浩司 (2014a) 鹿児島県におけるトガリアメンボの分布について . *Satsuma*, (151): 121-126.
- 中峯浩司 (2014b) 鹿児島県におけるトガリアメンボの越冬世代の調査 . *Satsuma*, (152): 72-73.
- 中峯浩司 (2018) 鹿児島大学構内でトガリアメンボを採集 . *Satsuma*, (161): 76.
- 中峯浩司 (2019) 肝付町（大隅半島）でトガリアメンボを採集 . *Satsuma*, (164): 2.
- 中峯浩司 (2023a) 鹿児島県本土で採集した水生昆虫の記録（その1） . *Satsuma*, (171): 183-193.
- 中峯浩司 (2023b) 鹿児島県本土で採集した水生昆虫の記録（その2） . *Satsuma*, (172): 165-174.
- 大原賢二 (2013) 九州におけるトガリアメンボの分布について . *Satsuma*, (149): 147-152.